



Title	西鶴読解の壁 : 「ワークショップ 西鶴をどう読むか」報告を兼ねて
Author(s)	飯倉, 洋一
Citation	季刊リポート笠間. 2013, 55, p. 21-28
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/49360
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

西鶴読解の壁

「ワークショップ 西鶴をどう読むか」報告を兼ねて

飯倉洋一

〔大阪大学教授〕

日本近世文学。著書に『秋成考』（翰林書房、二〇〇五年）、『上田秋成一編としての文芸』（大阪大学出版会、二〇一二年）、『秋成文学の生成』（共編、森話社、二〇〇八年）、『なにわ古書肆 鹿田松雪堂五代のあゆみ』（共編、和泉書院、二〇一二年）などがある。

「西鶴読解の壁」と題して書くわけだが、ベルリンの壁のように、西鶴読解の方法が「壁」を境に二分しているという訳ではなからう。西鶴の読解方法は多様、むしろ百家争鳴の状況というべきか。ただ、西鶴研究

現在に至る。一連の流れは等間書院のウェブサイトにまとめられているが、^{▼注①}ここで簡単に私なりにおさらいしておこう。

▼2012・10月 木越俊介論文「西鶴に束になっ

てかかるには」と篠原進の反論

木越俊介「西鶴に束になってかかるには」(『日本文学』

二〇一二年一〇月)の主張は、有働裕のまとめ^{▼注②}(西鶴研究会

掲示板、二〇一三年三月二十八日)をそのまま借用すると、①

西鶴研究においては「ぬけ」のような用語が融通無碍に使用され、とりわけ西鶴を過剰に「政治的な文脈」

論したことにより、一氣に論争に火がついた。論文・研究会・ブログらを舞台に侃々諤々の議論が行われて、

で読もうとする傾向がみられる。②西鶴研究においては、他の研究分野から見ればわかりやすい典拠関係が意外にも看過されており、雅文学や伝承文芸などとの関連を近世文学研究者が「束になって」追究する必要がある。」というものであった。②は、西鶴のテキストにみられる空白（読解困難な文脈）を、「ぬけ」と称して、西鶴が政治批判をそこに籠めたとする読みに対して、そういう恣意的な想像力を発揮する前に、その空白を埋める典拠探しをする方が先ではないかと提唱したものだ。

これに対して篠原進は、「西鶴研究をより活性化するためには、その挑発に応えることも必要かと判断し」、笠間書院のブログ（十月二十四日付）で異例のスピード反論を行った。題して「発熱する胡桃」^{注3}。その主旨は、「ぬけ」を厳密に定義することにさほど意味はない、西鶴にとって『「ぬけ」とは、第一義的にはより高度で、人を驚かす謎を提示する装置だったの』であり、政治的文脈に限って用いられているわけではないのに、「こ」と『政治的な文脈』に限ってバイアスがかかるふしぎな傾向が近世文学研究者の一部に見受けられる」が、『政治』に触れることは、当世の風俗や社会を積極的

に読み込んできた西鶴俳諧の当然すぎる帰結」だという。木越の示した三つの典拠説には否定的である。というよりも木越説は篠原に何の感慨ももたらさなかつようだ。そして一転して篠原はアジる。周到で細かい手続きを踏んだ研究者的議論はもういい。今や三谷幸喜でさえ『世間胸算用』を読んだことがないような時代、西鶴のテキストが面白いことが忘れられている。我々は高校で、大学で、カルチャーセンターで、受講者の目を輝かせるような、驚くような読みを見せるべきだ、と。「発熱する胡桃」とは、そのように現代人をエキサイトさせる西鶴テキストの比喩である。

西鶴研究会掲示板板や一部ブログで、この投稿は話題となった。論点はやはり「政治的な文脈」であった。川平敏文は仮名草子に政治批判があるのだから、西鶴にないとは言えないと篠原論に理解を示す一方、「ぬけ」や「カムフラージュ」を前提に解釈がはじまるとしたらそれはおかしいとした^{注4}（関山子余録、十月三十日付）。篠原のいう「近世文学研究者の一部」に目されていると感じた私は、「政治的な文脈」が西鶴にないというわけではない、それを主題化していると言われると違和感があるのだと述べた^{注5}（忘却散人ブログ、十一月

▼（3）「発熱する胡桃——木越俊介氏の挑発に応える」（篠原進）
【西鶴と浮世草子研究 repository】
http://kasamashoin.jp/2012/06/repository_1.html

▼（4）「西鶴の政治性」（関山子余録）
<http://blogs.yahoo.co.jp/karanshi/3695698.html>

▼（5）「篠原進氏のスピード反論」（忘却散人ブログ）
<http://bokyakusanjin.seesaa.net/article/29982823.html>

一旦。川平は、長谷あゆす「『懷硯』巻五の三「居合もだますに手なし」考―「仁政」に対する風刺をめぐって」(『国語国文』二〇二二年七月)に、西鶴が政治批判を籠めたという読みの典型を見た(関山子余録、十二月九日)。ちなみに川平は翌年六月の学界時評(『リポート笠間』五四号)でも長谷論文に言及する一方、『近世文藝』九七号(二〇一三年一月)所載の南陽子の『万の文反古』論を、「注釈による、痛快な読みの転換が味わる例」として評価した。南の論は政治的文脈に関わるものではないが、確かに面白い。

▼2013・3月 第三十六回 西鶴研究会・共同
討議「発熱する胡桃」

西鶴研究会では、翌二〇一三年三月の研究会に木越を招き、篠原とともに発表させ、議論を深めようという事になった。篠原は「発熱する胡桃」を後半部とする「あらすじの外側にある物語―『新可笑記』の表現構造―」(『青山語文』四三号、二〇一三年三月)を書き、^{▲注7}これが同研究会では資料として配付されたという。

篠原が想定する「発熱する胡桃」とは、どのような読みをもたらすテキストだったのだろうか。いくらそ

れらしき典拠を指摘しても、面白くなければ現代人を驚かすことはできない。「あらすじの外側にある物語」で、篠原は『新可笑記』巻五の二の「あらすじ」からは逸脱している部分にこそ、西鶴の真意が隠れているとし、そこに閉塞感に満ちた武士の宮仕えの悲哀、ひいては政治批判を読みとる。同話の典拠を指摘する仲沙織(大阪大院生D3)の学会発表に言及した上でだ。つまり、「若者よ、典拠探しよりも面白い、現代人にもインパクトを与える読みがあるんだ、それがこれだ」と示してみせたとも言えよう。若手の仲を批判する体だが、そこには西鶴研究をもっと活性化したいという篠原の切実な思いと若手へのエールが感じられる。

青山学院大学で開かれたこの研究会「共同討議 発熱する胡桃」は大方の関心を集め、盛況だったらしい。その報告は一週間後、西鶴研究会掲示板に有働裕によつて書き込まれた。^{▲注8}私なりに読むと「ぬけ」の議論に大きな展開は見られなかったが、「研究者が誰にむけて、どういう読みを発信するのか」という問題が論点として浮上したという総括のようだ。「教室こそ最前線」という篠原の主張である。研究者間の「西鶴のテキストの政治性」についての見解をめぐる壁よりも、

▼(6)「西鶴の政治性
続」(関山子余録)
<http://blogs.yahoo.co.jp/kanzanshi/36990235.html>

▼(7)篠原進の論文はインターネットでも公開されている。CINJでのURLは以下。
<http://ci.nii.ac.jp/naid/20005302660>

▼(8)注(1)参照。

研究者と一般読者の壁の方が深刻だというわけである。これについてその後議論が発展しているわけではないので、私見を述べておけば、研究者が一般読者に西鶴の面白さを伝えるために、研究上の厳密な手続きを経て同時代的な読みの復元を目指すよりも、現代人にインパクトを与える読みを提供することに力を注ぐべきだという篠原のスタンスには賛成できない。教室にいる学生に「なぜそんな読みが面白いのか？」と疑問を持たせ、やがて現代とは異なる物差しで読んでいくからだと感じさせることの方が大事だと私は思う。教師というのは、「サンデル教授の白熱教室」のような「盛り上がる授業」について憧れるものだが、それがその場の充足感で終わるだけという結果になることも十分考えられるのだ。これは自戒を込めて言う。古典が読まれなくなった時代に危機感を感じるから、その面白さを伝え、引きつけ、次代に繋げたいというのは、古典研究者共通の悲願だろう。だが現代の価値観に基づく面白さを伝えるのは古典研究者の本来の仕事ではない。といって、現代と切り離された好事家的な営為であつてもよくない。現代人が失った価値観に基づいた当代の読みでの面白さを伝え、それを現代に問い返

し、架け直すことが古典研究者の責務だろうと思う。話を戻そう。京都近世小説研究会でも、西鶴研究の動向を注視していたから、例会で木越が西鶴研究会で様子を報告してはどうかと提案したが、いっそ関西でも西鶴をどう読むかを、みんなでワイワイ議論しあつたらいいんじゃないか、と話が大きくなり、特別企画を組むことになった。成り行き上、私がコーディネート兼司会を仰せつかった。日程は西鶴忌の前日の九月七日とし、タイトルは「ワークショップ 西鶴をどう読むか」とし、発表者等の人選に入った。

▼2013・6月 九州大学国語国文学会講演・中野三敏「西鶴戯作説再考」

そんな折、川平敏文のブログで、中野三敏が六月八日の九州大学国語国文学会で「西鶴戯作説再考」と題した講演を行ったことが報告される。西鶴戯作者説は、『好色一代男』首章の新たな読みを示した日本近世文学会での発表（「戯作」の範囲——一代男・首章を例にして、一九九六年秋季大会）以来、中野が主張し続けているものだが、西鶴研究者はほとんど無視し続けている。ここ一年の議論でも中野の西鶴戯作説が話題にされたこと

▼(9)「中野先生の西鶴論」(閑山子余録)
<http://blogs.yahoo.co.jp/kanzanshi/37559148.html>

はなかった。だが、政治的文脈で西鶴を読むかどうかという論点とは当然関わってくるはずである。期待通り中野からワークシoppへの参加表明があった。東京・関西の西鶴研究者も数多く参加を表明、浜田啓介は講評のために自らの西鶴論を準備していると私に通告してきた。さらに仁斎研究で著名な大谷雅夫が、中野三敏批判の立場から参加するという噂が聞こえてきた。「ぬけ」や「政治的文脈」「典拠」だけではなく、中野説や浜田説も入り交じり、様々な壁が乱立、収拾がつかなくなるのか。この混沌たる展開には、ほくそ笑むしかない。

▼2013・9月 京都近世小説研究会 特別企画・「ワークシopp 西鶴をどう読むか」

さて当日は東京・金沢・島根・鹿児島をはじめ各地から多数の研究者が駆け付け、用意した特別会場がほぼ満席となった。

まず、浜田泰彦・木越俊介が「最近の西鶴作品の〈読み〉をめぐる」と題した報告を行った。二人は報告と同時に自らの読みを示した。木越は仲・篠原が火花を散らす『新可笑記』巻五の二の読解論争に割って入

り、浜田は『武家義理物語』巻一の五「死なば同じ波枕とや」を、無謀な若殿を批判する文脈ではなく、自分の息子を死なせた張本人の主君でさえたてる式部の忠誠的行為を礼賛する話として読解した。実は浜田の読解は、本話の「若殿御機嫌良く」の部分に着目した小学館全集の広嶋進注「若殿には全く反省の様子が見えない」を引き、西鶴が「美談に小さな亀裂を入れ」と評した篠原進の「西鶴 浮遊するテキスト」（日本文学二〇〇七年二月）や「浮世草子の〈毒〉と奇想」（『文学という毒』笠間書院、二〇〇九年）を意識した、アンチ篠原的な読みだったのだ。

二番手の南陽子は、「好色一代女」巻一の一における『一代女』像の形象について」と題した発表であった。南は『一代女』冒頭に『遊仙窟』がふまえられていることが現在の研究状況では自明になっていることに疑問を呈し、たとえば謡曲の「小督」が典拠だと考えれば、それなりに通用する。つまり本文のどこに焦点を当てるかによつて、さまざまな「典拠」が指摘可能であるとして、典拠研究の恣意性を指摘した。その上で、本文中の「恋慕の詩」は小歌を指し、挿絵の楽器が尺八ではなく一節切であることから『遊仙窟』典

挹説に疑問を投げかけた中野眞作の論文を援用し、当代性・同時代風俗との繋がりを重視する読みを提示した。コメンテーターの森田雅也は西鶴が『遊仙窟』を読んだ可能性について質したが、南は作者の読書経験を考慮しないテクスト論的な立場もあってそれを重視しないと答えた。質疑の際に中嶋隆は、『好色一代女』が『遊仙窟』のイメージを趣向として利用したことは確かであると反論した（ではそれを『典拠』と言っているのかを私などは確認したいのだが）。質疑によれば南の『遊仙窟』認識も中嶋と大きな違いはない。だが、論の前提が正反対である。中嶋は南の挑発を鮮やかに切り返したが、典拠研究の現状を見ると、南の問題意識を黙殺することはできないだろう。

締めは廣瀬千紗子が、『武道伝来記』巻一の二「毒薬は箱入の命」の読みを披露した。悪事を犯した姉（小梅）を討たれた弟（九蔵）の敵討ち（失敗に終わるが）の話と、こちらは付け足し的なエピソードと見える喧嘩の末斬られた兄（森右衛門）の弟（森之丞）が敵討ちをする話（成功する）が、実は対応していることに着目、敵討ちという観点からきちんと構成されているという解釈を示した。コメンテーターの杉本好伸が、それでは前

半の刑部の話はどうなると問い、かつその読みを示した。ともすれば読み過ぎしがちな細部に着目する、作品論の手法のような議論であり、読みの原点に帰ったような気持ちになった。ここでは、西鶴の作品を読むのに特別な方法はない、作品ごとに読み方があるのだということが暗に示されたようだった。

そのあとの総合討論と浜田啓介の全体講評については、私の偏見により、「壁」に関わる発言を抄出したい。中嶋隆は西鶴の議論が西鶴だけに閉じられているのではない。仮名草子に存在する政治批判を、西鶴はカムフラージュしたとすればそれはなぜか、馬琴の隠微と西鶴のカムフラージュしたものとの違いは何かなど、文学史を見据えた議論も必要だと訴えた。そういう意味で中野三敏の西鶴戯作者説も検証されねばならないだろうと。

篠原進は、研究者の議論が厳密を期すあまり、教室という現場と絶望的に乖離してしまったことへの自覚を促し、浜田泰彦が教室で自説を示したことに関わって、学生の読みの芽を摘んでいることはないかと迫った。

中野三敏は、中嶋隆の発言を受け、そもそも江戸時

代に「文学」という近代的な概念を使うことを再考しなければならぬと述べた。西鶴戯作者説は、西鶴の中だけで西鶴を考えているものには理解できないというところでもあろう。考えてみると、中村幸彦以後、西鶴を江戸文芸全般の中に位置づける考察は極めて少なかったのではないか。中野の西鶴戯作者説は、江戸の俗文芸全般を戯作と呼ぼうという大きなパラダイム転換構想の一部に過ぎない。西鶴研究の中でだけで議論してもかみ合わないだろう。

大谷雅夫の視座はやはりスケールが大きい。大谷は、西鶴は人の心が一瞬にして何気ないことで変わるということを描いたと指摘し、それは心を「活物」として考える伊藤仁斎の考え方と同じだという。そういうえば、西田耕三も同じことに着目していた（『人は万物の霊』森話社、二〇〇七年）ことが想起される。元禄の世の中の活気を西鶴と仁斎は共有していたが、その後活物論はすぐに消えるという。大谷は、したがって少なくとも浮世草子は西鶴、つまり元禄期に頂点があると思われるが、中野の「ひとこぶラクダ」（江戸文芸は近世中期に頂点があるという考え方）説とはどう整合するのかと質した。大谷が中野に言いたかったことは、西鶴戯作者説

批判ではなく、こちらの方だった。中野の「ひとこぶラクダ」説は、江戸文芸を雅俗のバランスからトータルに考えるものだから、個別のジャンルを見ていけば当然このような異論が出る。ただ大谷の真意は、西鶴だけではなく、元禄そのものに江戸文芸の頂点を見るべきだということなのかもしれない。司会者として議論を深められなかった不手際を反省する。

全体講評の浜田啓介は、重要な提言を数多く行った。まず西鶴研究全体について、同じ課題を共有し、複数の研究者がそれへの試論・回答を出し合い、諸論を批判統合する研究があってもいいのではないかと述べた。虚を突かれる発想であるが、その課題の選択を誰がやるのか。課題を具体的に設定すること自体が研究の中では大きな位置を占める。単に「一代男」論とか、「西鶴と金銭」というような課題では、雑誌の特集と同じになる。なかなか難しい。さて私が最も印象に残ったのは、「西鶴は自ら課題を課して解く人」だったという見立てである。『一日独吟千句』というのもそれ。これは為家や世阿弥や守武と同じだという浜田の開口の広さに舌を巻きつつ、なるほどと膝を打った。これは西鶴作品を読むときに、常に作品集全体への目配り

を忘れてはならないことに繋がるだろう。『武道伝来記』の作品論をやるうと思えば、まず『武道伝来記』が西鶴のどういう課題への解であつたかを押さえた上で個別の章に取り組まねばならないことになる。演繹と帰納の合わせ技が必要である。もちろん浜田は具体的な西鶴作品に即して、西鶴が自ら課した課題をどう解いたかを開陳したが、そこは割愛する。来年刊行予定の『上方文藝研究』第十一号に、この全体講評の活字化を掲載予定なのでそちらを参照されたい。浜田の二十五分に及ぶ熱弁に会場は圧倒された。

▼ワークシヨップは終わらない

ワークシヨップの翌日、簡単な報告を拙ブログに書いたところ、篠原進から熱いコメントが寄せられた。^{▼(注10)}『武家義理物語』『死なば同じ波枕とや』の「若殿ご機嫌よく」の読みが、西鶴作品の政治性を読み解く鍵だというのだ。ここでも篠原は浜田泰彦の読みが「西鶴に政治性はない」という神話に捉われているのではと批判する。これに浜田泰彦が再反論し、ワークシヨップでの自説を補足すると、ワークシヨップの参加者早川由美と不参加者染谷智幸がこれに続いた。ワーク

シヨップは終わっていないかった。かえって広がっていた。まさに浜田啓介の「課題を共有して複数の研究者が試論を出し合う」という提案にこたえる議論となったのである。その後、染谷と私の間でやりとりが続いた。注目すべき今後の動きがある。来年三月の西鶴研究会に中野三敏が乗り込み、「西鶴戯作者説」を問う。時をほぼ同じくして、篠原批判を含む中野論文も公表予定であるという。『新可笑記』をめぐる篠原の挑発を受けた仲の論文も年末年始に二本出る。また先述したように、浜田啓介の全体講評の活字化もある（原稿はすでに頂戴している）。西鶴を特集する雑誌の企画もあるやに聞き及ぶ。

今回のワークシヨップは、西鶴読解に、政治的文脈の有無以外にも、様々な壁が存在していることを実感させた。と同時に、壁をやすやすと越え、壊す方法も示唆されたように感じる。「議論があり、対立があるのは素晴らしいことだ」と、本ワークシヨップに対して、ある中世文学研究者から言葉を賜った。若い人がこれからの議論をリードしていくことを心より願うものである。

なお敬称は略させていただいた。ご海容を乞う。

▼(10)「ワークシヨップは終わらない?」(タイトル変更) (忘却散人ブログ)。
<http://bokyakusanjin.sesaa.net/article/37423569.html>
右エントリーのコメント欄に、篠原、浜田、染谷ほかのコメントがある。